

岐阜城下町の空間構造と材木町

山 村 亜 希

一 はじめに

本稿は、戦国期に斎藤氏三代（道三・義龍・龍興）と織田信長の本拠となった、美濃岐阜城下町を対象とし、その景観形成プロセスの解明に、歴史地理学の立場から迫るものである。岐阜の城下町としての歴史は、十六世紀前期に稲葉山城を拠点とする斎藤道三（長井規秀）が建設した、戦国城下町・井口に始まる。斎藤氏は三代続き、井口城下町を本拠としたが、永禄十（一五六七）年に尾張の織田信長の侵攻によって、稲葉山城と井口城下町は奪取された。信長は、城郭・城下町を岐阜と改称し、再整備を行った（本稿では、斎藤期までを井口、信長期以降を岐阜とし、地点・場所として呼ぶ場合は岐阜と表記する）。信長は、天正四（一五七六）年に安土へ拠点を移転させたが、その後も、織田家の家督を継いだ織田信忠を始め、織田信孝、池田恒興・元助・照政、豊臣秀勝、織田秀信と中央政権の要人が次々と岐阜城主となり、城と城下町は維持された。しかし、慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦の前哨戦で岐阜城は落城し、城下町も徳川政権下で新たに加納城下町へと変更された。岐阜の町場は、当初は幕府直轄領とされ、元和五（一六一九）年以降は尾張藩領の岐阜町となり、加納城下町と並ぶ経済都市として、近世も発展を続けた。

井口・岐阜城下町の空間構造については、これまでも中世史料、発掘調査成果、近世地誌等を総合的に用いた分析が進み、研究の蓄積は厚い（小島一九八四、土山一九九二、内堀二〇〇六・二〇〇八）。近世絵図や地籍図といった地図

資料についても、作成時期の状況をふまえた史料批判や、文献史料からは得られない多くの知見の提示（土山一九九一、寛・内堀二〇〇三、寛二〇〇九）がなされてきた。それでもなお、近世絵図・地籍図の描写内容を詳細に、かつ全体を見渡す歴史地理学的分析によって、岐阜城下町の空間構造の考察を深化させる余地は十分に残されている。

具体的に述べると、明治期地籍図の地理情報を可能な限り古い段階まで遡らせた上で、①自然地形と街路形態との関係を検討し、そこから街路の成立順序を推定することが可能である。さらに、②街路・地割のパターンを抽出し、その形態差から町の成立順序を推定することもできる。そして、①・②の分析によって得られた、街路と町の相対的な成立順序に、③同時代史料や地誌、伝承から絶対年代を与えれば、岐阜城下町の形成プロセスを地図化しうるだろう。これは、かつて、同じ戦国期の城下町である周防山口において、その景観形成プロセスを復原する時に用いた方法（山村二〇〇八）であり、この方法を岐阜に適用する。さらに、①③の分析を行うと、岐阜城下町の景観形成の過程で、特徴的な地割・街路形態を成すに至った町を抽出できる。岐阜においては、同時代の文献史料を用いて、その特徴的な町の形と立地に、どのような意味があるのかを探ることも可能である。

前述のように、本稿で分析する主な資料は、明治期地籍図と近世絵図である。戦国期岐阜城下町の範囲は、近世・近代初期には岐阜町、富茂登村、稲束村に分かれていた。このうち、稲束村は小さい飛地に過ぎないので、中世の岐阜城下町は、ほぼ近世・近代の岐阜町と富茂登村の範囲に相当する。近代以降の地籍図もそれぞれ別に作成され、明治二十一年（一八八八）年十月という同時期に作成された地籍図としては、「厚見郡岐阜市街絵図」と「厚見郡富茂登村字絵図」（岐阜市所蔵）がある。この明治二十一年図をトレース・合成した、旧岐阜城下町全域の地籍集成図は、既に内堀論文（二〇〇八）の中で紹介されている。ただし、富茂登村に関してのみ、明治二十一年図より古い、明治七（一八七四）年十月作成の「第一大区三小区厚見郡富茂登村全図」（岐阜市博物館所蔵）も伝存する。富茂登村の明治七年と明治二十一年地籍図を比較すると、大規模な変化はないが、細部で所々、地割・地目の変更がみられる。よって、本稿では、富茂登村に関しては、より古い地理情報を載せる明治七年地籍図を利用し、岐阜町部分は明治二十一年図を、富茂

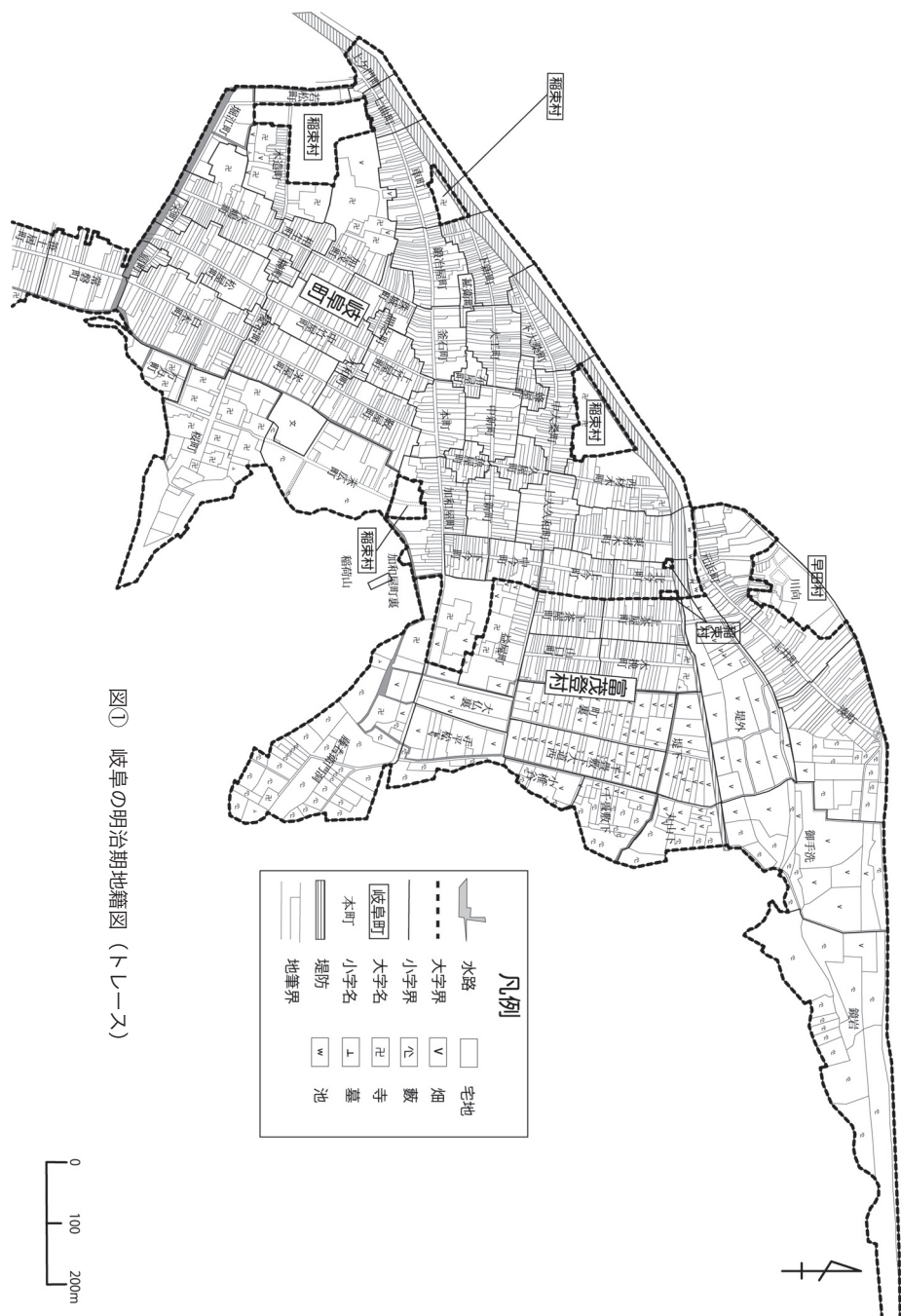


図1 岐阜の明治期地籍図 (トレース)

登村部分は明治七年図の地籍情報を合成した地籍集成図（図①）を作成した。

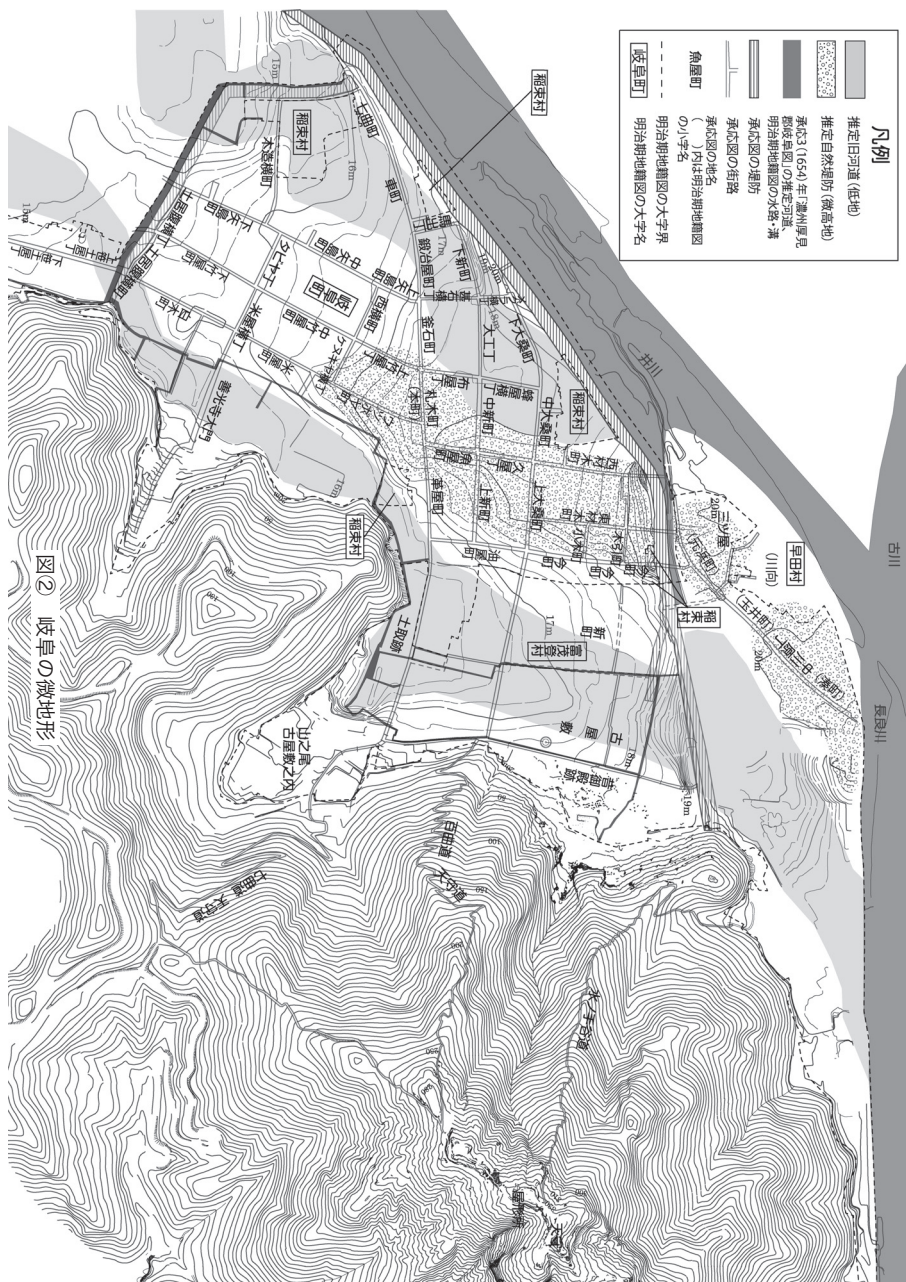
この明治期地籍図の地理情報を、少しでも戦国期に接近させるため、承応三（一六五四）年に尾張藩が作成した「濃州厚見郡岐阜図」（以下、承応図と略す）を用いる。承応図は、尾張藩が岐阜町を「町」として支配すべく舵を切った転換期であり、町の拡大期でもあった承応三年に、藩が改めて平面的に岐阜町を把握するために作成した絵図で（寛二〇〇九）、現存最古の岐阜町図である。承応図は、名古屋市蓬左文庫所蔵図と西尾市岩瀬文庫所蔵図の二枚が伝存するが、いずれも写図であり、原本は見つかっていない。両者を比較すると岩瀬本の方がより良質な写しと考えられている（寛・内堀二〇〇三）ため、本稿でも基本的に岩瀬本を使用した。

二 微地形と街路・地割形態からみた岐阜城下町の形成過程

（1）旧河道と自然堤防

最初に、井口・岐阜城下町の形態に大きな影響を与えた地形環境を、微地形レベルで検討する。ここでは、岐阜城千畳敷遺跡の内容確認調査に伴って作成された「史跡岐阜城跡・岐阜城下町遺跡地形測量図」（岐阜市教育委員会他二〇一三）を用いて、そこから平野部で二十センチ間隔、山地部で五メートル間隔の等高線を抽出した。ここから、等高線の湾曲・突出の向きや粗密を判断し、周囲と比較したときの相対的な高地と低地の形状を読み取った。これに、説明の便宜上、承応図と明治期地籍図から、川筋、溝・水路、堤防・土手、道と町名・地名、近世の町村界に相当する大字の境界線と大字名を加えたものが、図②である。

もちろん、この等高線図は、現在の標高に基づいたもので、戦国期の地形そのものではない。しかし、岐阜城下町遺跡の近年の試掘調査を総合すると、戦国期やそれ以前の地形の傾向もほぼ同様であると推測されている（恩田二〇〇六）。よって、本稿でも図②の等高線図を用いて、戦国期岐阜の微地形を推定することとしたい。



図②からは、金華山山麓に沿って南下する带状の凹地が明瞭に読み取れる。地籍図にみえる明治期の水路も、南側の土手（惣構）に沿う水路を除き、全てこの旧河道に沿って流れる。これは、発掘調査でも確認された、十五世紀末から十六世紀初頭にかけて埋没した河川状の低地である（恩田二〇〇六）。埋没以前から、既に河道は転流し、埋没時には静水となっていた可能性が高いとされる（恩田二〇〇六）。下流で清水川とつながるこの旧河道は、規模と形状からみて、長良川扇状地上の網状水路の一つであろう。中世長良川の本川は、方県郡と厚見郡の郡界線となっている古川と推定されるが、斎藤期以前には、本川とは別に、少なくとも金華山に沿って南流する支流も存在したことになる。この旧河道のうち、特に低い場所は、承応図に「土取跡」と表現された付近である。ここは、旧河道の屈曲点で水が溜まりやすく、東から金華山の谷水も合流する場所で、元々、低湿地であったのに加えて、承応図作成までの人工的な土砂掘削によって、土地がさらに低くなったのだろう。

岐阜の微地形から推定できる旧河道は、この金華山麓の旧河道だけではない。図②からは、北側の堤防（惣構）沿いの大字稲束村付近から南下し、下大桑町、大工丁、下新町、車町を経て、西側の土手（惣構）沿いの大字稲束村にかけて延びる、带状の低地も見出すことができる。位置と形状からみて、これも長良川扇状地上の網状河川の旧河道であろう。山麓に沿う東側旧河道に比べると、浅く輪郭も不明瞭なことから、東側旧河道よりも古い段階から堆積が進んだとみられる。この西側旧河道のうち、特に低湿な場所が、蜂屋横丁周辺と西側惣構沿いの大字稲束村周辺の二箇所である。

一方、これら二本の旧河道に挟まれた土地は、比較的高い微高地である。特に高い場所は、東材木町から久屋丁、魚屋町を経て、やや西に振り、札木町（本町）、ウツボヤ町、上竹屋丁までの範囲である。旧河道に沿う、細長い島状の形状からみて、網状河川の自然堤防と考えられる。最高地点は魚屋町付近であり、現地表面でも、山麓旧河道の低地よりも約2mも高い。この自然堤防の北端にある東材木町は、その北で堤防に接するが、堤防を越えた字元浜町にも微高地があり、堤防建設以前は一続きの自然堤防であった可能性もある。字元浜町の自然堤防と中川原丁の微高地との間に

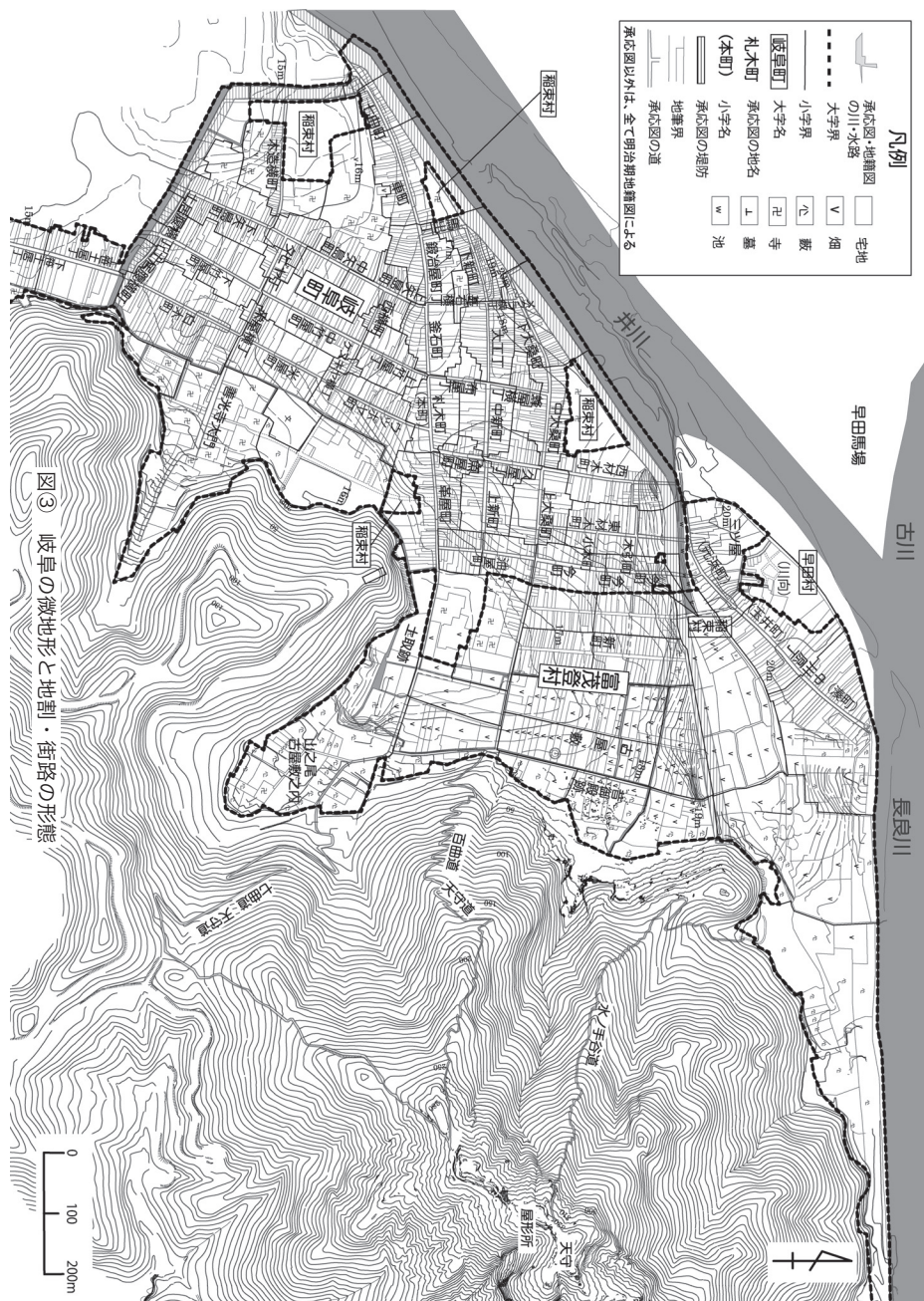
挟まれた、字玉井町・大字早田村川向付近は低地となっている。ここから、中川原丁は、字元浜町とは別の自然堤防ないし中州上に立地した集落と推測される。

(2) 微地形と旧道

前節の微地形をふまえて、街路と町の相対的な形成順序を推定する。このとき、戦国期周防山口の景観形成プロセスを解くために実践した、街路・地割の形態分析の視点（山村二〇〇八）を導入する。それは、中世都市においては、①微高地上の街路は低地の街路よりも成立が古い、②微起伏の形状に合致する街路は微起伏を無視する街路よりも成立が古い、③直線街路は相対的に新しく、ある段階で人為的・計画的な敷設が行われたことを示唆する、④背割線が直線の町はそうでないものに比べて新しい、⑤交差点に間口を空ける地割が含まれる町は、そうでない町よりも成立が古い、という推測を前提とする。この分析のため、等高線図に、承応図と明治期地籍図から、川筋、溝・水路、堤防・土手、道と町名・地名、町村界に相当する大字の境界線と大字名、各町の形態を示す小字界、地筆・地目を加えて、図③を作成した。

図③を見て、最初に気づくのは、南北に延びる自然堤防の尾根の形状に合致するように、久屋丁と魚屋町を通る南北道が延びている点である。この南北道の南は、東西道の七曲通（革屋町―札木町―釜石町の街路）に突きあたる。この南北道の南端付近が自然堤防の尾根の南端でもあることから、南北道は微高地の尾根を選んで走る古道であると推測される。

魚屋町と久屋丁は、この南北道を軸とする両側町であるが、町域（小字）の背割線は揃わず、短冊形地割の奥行はガタガタで、交差点に向かって短くなり、全体として菱形の形状を成す。このような形状の小字は、道を軸とする地割が完成する前に、それとは異なる方向の新道が交差して開設され、新道を軸とする両側町も発達したときに形成される。このとき、先行する道沿いの小字の拡大は止揚されるが、一旦形成された地割は払拭されないで、それらは周囲の大



型小字に挟まれた、菱形の小型街区として残る。つまり、久屋丁―魚屋町の街路とそれに沿う町は、それに交差する新町通（上新町―中新町―大工丁の街路）や百曲通（上大桑町―中大桑町―下大桑町の街路）の敷設及びそれらに沿う町の形成よりも、古いと推定される。

その傍証となるのが、交差点における地割の向きである。魚屋町―久屋丁の南北道と新町通の交差点の四隅の地割は、北東を除き全て南北道側に間口を開け、久屋丁と魚屋町に属する。南北道とそれに沿う町は、新町通よりも優勢であることが分かる。ここからも、新町通の開設とそれを軸とする町（上新町・中新町）の成立は、久屋丁と魚屋町より新しいと言える。

七曲通や百曲通と久屋丁―魚屋町の南北道の先後関係は、新町通ほど明白ではない。しかし、百曲通と南北道との交差点南コーナーは、南北道に間口を開ける短冊形地割である。ここから、久屋丁が百曲通沿いの町（上大桑町・中大桑町）より成立が古いことが推測される。七曲通と南北道の交差点の北コーナーも、東側に関しては、南北道を軸とする短冊形地割となっており、交差点以東の七曲通沿いの革屋町よりも、魚屋町の成立が古いと推定される。一方、地割形態から、この南北道沿いの町との時期差を想定し難いのが、札木町（本町。本町は札木町より古い町名であるため、以後本町とする）であり、魚屋町と本町の集落形成は、ほぼ同時期と推測される。よって、本町―魚屋町―久屋丁は、一続きの道に沿う集落であった可能性がある。

さらに、地割と街区の形状から、本町に続く可能性のある集落がある。七曲通と上竹屋丁通の交差点の南側に注目したい。交差点の南東隅の地割は上竹屋丁通に間口を開ける短冊形であり、上竹屋丁に所属する。七曲通沿いの小字に対し、それに交差する南北道沿いの町の方が優勢な交差点は他にない。近世御鯨街道を軸とするウツボヤ町ですら、七曲道との交差点の地割は本町内にあり、交差点における優位は全く見て取れない。もちろん、上竹屋丁に属する交差点南東隅の地割も奥行は極めて短く、上竹屋丁の集落形成が本町に完全に先んじたとも言えない。むしろ、本町と上竹屋丁の集落形成はほぼ同時期であり、上竹屋丁―本町―魚屋町―久屋丁が、一筋の道であった可能性が高い。この範囲は、

ほぼ自然堤防上で完結する。ただし、この道は途中で二回直角に近い角度で屈曲しており、古道としてはやや不自然な形状であることから、原型として、これらの町を結んで緩くカーブする道が存在し、ある段階で直線に整備されたのかも知れない。

七曲通の北側には、魚屋町―久屋丁の道筋以外にも、布屋丁通と甚右横丁通の南北道がある。南側には、上竹屋丁通以外に、御鯔街道（ウツボヤ町―米屋町―白木町）と矢島町通（上矢島町―中矢島町―下矢島町）がある。これらの北側の街路と南側の街路は、七曲道を境にして方向が異なる上、旧道と推定した上竹屋丁と本町の交差点を除き、七曲通との交差点は四つ辻ではなく、互い違いの三叉路となっている。一見すると、矢島町通、甚右横丁通と七曲通の交差点は四つ辻になっているように見えるが、地籍図を詳細に見れば、二本の南北道の接点は、七曲通でずれている。南北道と七曲道の交差点の地割は、先述の古道を除き、全て七曲通の方が優先しているので、地割形成は七曲通沿いの方が古い。これらをふまえると、七曲通を軸として、後に南北それぞれの方向に、街路が派生したというプロセスを推定できる。なお、近世の御鯔街道は、自然堤防の尾根を通過しており、その点では地形に適った古道とも考えられるが、地割形態からは御鯔街道沿いのウツボヤ町より、本町や上竹屋丁の方が古い。ここから、尾張方面に向かう古道は、近世の御鯔街道ではなく、上竹屋丁から分岐していた可能性を指摘しておきたい。

（3）長方形街区と横町

図③からは、一般的な近世城下町にみられる、道を軸とした両側町で、背割線が直線の長方形街区が、広く分布していることが分かる。これは、平行する道を複数開設し、その中央を直線の背割線で区分して、道を軸とした長方形街区を割り出す計画的な町割が、岐阜においても施行されたことを示す。七曲通以北で、長方形街区の軸となっている道は、七曲通、新町通、百曲通の三本の東西道と、今町―油屋町通、東材木町通、西材木町通の三本の南北道である。七曲道以南では、御鯔街道、竹屋丁通、矢島町通の三本の南北道である。

しかし、岐阜町の中央付近に分布する長方形街区の合間には、久屋丁や魚屋町のような狭小な横町が混在しており、文字通りの「長方形」街区とはなっていない。このように長方形街区と横町が混在する特徴的な町割となったプロセスを推定すると、以下のようなになるだろう。道が平行して複数開設され、それらを軸とする両側町が計画的に形成されたが、それが長方形街区としての完成形に至る前に、まだ長方形街区が及んでいない空閑地に、道同士を結ぶ小道（横道）を軸とする両側町が形成された。ほとんどの横町は、周囲の長方形街区の背後に隠れるほどの小さな小字であることから、長方形街区がほぼ完成してから、背後の空閑地を通る横道に沿って、小さな両側町が形成されたパターンが一般的であつただろう。ただし、久屋丁、魚屋町、布屋丁、蜂屋横丁の四つの横町は、隣接する長方形街区の形状を歪めるほど大きく、七曲道、百曲道、新町通に接近する特異な小字形態をしており、成立時期が横町の中でも相対的に古いことが推定される。つまり、長方形街区と横町の範囲・地割の関係によって、両者の成立時期の新旧差やタイムラグを推測できる。

前節で古くに集落形成が進んだと推定した久屋丁・魚屋町とよく似た形態の小字が、布屋丁である。布屋丁の軸となっている南北道は、上竹屋丁の古道を延長した道であり、周囲に先んじて道が成立したとしても不自然ではない。特に北西の大工丁に対して大きく張り出していることから、布屋丁は大工丁と同時期か、それより古くに成立したことが示唆される。布屋丁の北にある蜂屋横丁は、南の新町通を軸とする中新町と大工丁には劣位にあるが、北側の中大桑町に対しては優位にある。ここから、蜂屋町は、中新町・大工丁の形成以降、中大桑町と同時期、もしくはそれ以前に形成されたことが推測される。

反対に、今町―油屋町通、東材木町通、西材木町通を軸とし、横町が混在しない「純粋な」長方形街区では、長方形街区の形成途上で横道に沿って町が形成されることはなく、中心街路に沿って順調に両側町が発達したのだろう。それは、これらの地区が旧岐阜町の東端と北端という周縁に位置し、中心部ほど急速な町の発達をみなかったためと考えられる。

油屋町通と七曲通との接点の地割は、優先道であるはずの七曲通に面さず、油屋町通側に向く短冊形地割で、油屋町に属す。ここから、油屋町通は、七曲通を軸とする革屋町と同時期か、それ以前に形成されたと考えられる。また、新町通は油屋町通を東端として西へ延びていることから、新町通より油屋町通が古いことも分かる。さらに油屋町―今町通の全体を見ると、上新町と革屋町のみならず、上大桑町と東材木町も、今町通の直線の人工的な背割線に小字の形状が規定されており、油屋町と今町の通りを軸とする両側町の領域確定は、それより西側の町の範囲確定より早いか、同時期の可能性がある。

東材木町と西材木町は、百曲道を軸とする上大桑町、中大桑町の背割線の背後に位置しており、上大桑町・中大桑町の成立より後に、東西材木町の形成が行われたことが推定される。東西二つの材木町の地割を比べると、東材木町は短冊形地割が密集するのに対し、西材木町は広めの地割や横道沿いの短冊形地割の混在が目立つ。ここから、集落としては東材木町の方が優位にあり、その拡大によって、西材木町が成立したことが示唆される。

東材木町の通りをさらに北上すると、富茂登村の字元浜町・玉井町・湊町（承応図の中川原丁。以下、この地区を中河原とする）に至る。この道は、長良川を渡って対岸の長良三郷に出て、高富方向に向かう高富街道である。この中河原丁通は、自然堤防ないし中州の形状に合致する緩いカーブをなし、成立が古いことが推定される。岐阜町とは対照的に、字元浜町・玉井町・湊町ともに、この道を軸とする両側町の形態をとるものの、長方形街区は見あたらない。明確な背割線はなく、各地が自由に奥行きを設定した結果、字湊町や玉井町の短冊形地割の中には、岐阜町の町屋よりもあるかに奥行きが長いものもある。ここから、中河原においては、岐阜町とは対照的に、長方形街区が施行されず、城下町化の都市計画の規制から免れ、自律的に地割が伸張したことが推定される。

（4）城下町形成過程の地図化

地割形態やパターンから推定した道・町の形成順序をふまえて、井口・岐阜が戦国期に城下町化した具体的なプロセス

スを地図化した。地割・街路の形態分析だけでは、道と町の形成年次・時期まで迫ることができない。そこで、斎藤期・信長期の町立ての記述があることで著名な『中島両以記文』の他、中世史料、近世・近代の地誌類、伝承等から、景観構成要素（寺社、屋敷、町、道、公的施設等）の来歴とその根拠をまとめ（表①）、これを時期推定の材料に用いる。さらに、これらの諸施設の成立・存続年代を、都市の政治核である城郭・居館の変遷を基準として、織田信長の安土入城までを三時期に区分した。第一期は、城下町形成以前であり、天文八（一五三九）年と伝承される伊奈波神社移転時に城下町建設が開始されたと考える内堀論文（二〇〇八）に基づいて、天文八年までとした。第二期は、斎藤三代が稲葉山城主となり、井口城下町が形成された時期であり、永禄十（一五六七）年の織田信長侵攻までとした。第三期は、織田信長の岐阜城在城期であり、信長が安土城に移った天正四（一五七六）年までとする。各時期における景観構成要素の位置ないし形態を加えて、三時期の景観復原図（図④～⑥）を作成した。これに、岐阜城下町遺跡の考古学調査の成果（恩田二〇〇六）についても復原図に加え、推定の材料とした。

紙幅の都合上、井口・岐阜城下町の景観形成の特徴と都市史上の意義、街道等の比定の根拠については、別稿（山村二〇一四）の考察に譲り、本稿は三時期の景観復原図を提示するに留める。本稿では、岐阜城下町の景観形成過程で、斎藤期の惣構構築によって、城下町と川湊（中河原・早田馬場）とが物理的に分断され、信長期に惣構の内側に、「純粹な」長方形街区の材木町が形成された点に注目したい。それは、信長期については、長良川水運と権力の関係を読み解くことのできる史料が四点伝存しており、水運と権力の関係性が景観にいかに表示されているかを考えることが可能であるためである。次章では、詳細に史料を分析し、信長期に城下町内部に長方形街区の材木町が形成された意味について検討する。

表① 岐阜の寺社・屋敷・町・諸施設の来歴及び位置とその根拠

時期区分	山号寺院・神社名【 】内は宗派、地名・町名、施設名	出典：来歴／位置【 】内は関連情報
第1期：城下町形成以前 (～1539年)	伊奈波神社・峯権現・上ノ権現	志略：景行天皇14創建／志略：椿原、丸山、峯本宮は天守台の所にあり、雑事：西ノ洞西向き半道山に鎮座、本宮は南の山に鎮座し峯ノ権現という～続日本後記(市史)：承和12(845) 従五位下授与～三代実録(市史)：貞観11(869) 正五位上授与～三代実録(市史)：元慶4(880) 従四位下授与～美濃国神明帳(市史)：正一位伊奈波大神～美濃国第三宮因幡社本縁起(市史)：中宮(因幡大権現、本宮(峯権現)、下宮(金大明神) からなる、延文4(1359) 美濃国三宮を称す～梅花無尽蔵：明応5(1496) 衰退～明細：天文8(1539) 斎藤道三築城時に移転、而以：長井氏岐阜城築城時に移転／現存～言繼卿記：永禄12(1569) 8・1岐阜城内で「上之権現」を見る
	愛宕神社	旧市史：文明年間頃創建か～旧市史：天正4(1576) 9・12多和田新八直房寄進の舶犬あり
	鷲林山常在寺【日蓮宗妙覺寺末】	明細：宝徳2(1450) 斎藤利藤開基、斎藤道三菩提所／現存～市史(常在寺文書1)：天文19(1550) 斎藤道三禁制
	大叡山舍利院善行寺【天台宗→浄土真宗大谷派】	増補：佐竹義広の子大門の開基／現存(外笹土居町)～増補：永享元(1429) 善行寺の勅額を賜う～県史(善行寺文書1)：天正年間「羽柴秀吉・丹羽長秀・堀秀政連署禁制写(宛所を欠く)」を所蔵～増補：慶長6(1601) 家康山号寺号・仏舍利等を授与、真宗大谷派に改宗
	長栄山妙法寺【天台宗】→三融山円経寺【日蓮宗】	濃陽：二階堂道雅の菩提寺～濃陽：齋藤氏再興し改宗～濃陽：慶安2(1649) 改号
	誓願寺→易行山本誓寺→瑞華山感心院本誓寺【浄土宗鎮西派智恩院末】	旧市史：享禄年中(1528-32) 葉栗郡三宅村から移転、開山は眞言観念／現存(下矢島町)～志略：永禄の頃信良、尾張甚目寺の長禄2(1458) 鈔の梵鐘を岐阜城の時鐘として移し、後に本誓寺に寄付～市史近(本誓寺文書1)：天正9(1581)「知恩院院印改号証状」本誓寺に改称～市史近(本誓寺文書2)：慶長4(1599)「織田秀信判物」寺役免除
竹屋	法光山長照寺【日蓮宗妙覺寺末】	増補：天文6(1537) 創建／現存(中矢島町)
	薬師堂	濃陽：養老2(718) 行基、因幡山に薬師像を安置～濃陽：二階堂出羽守道雅の時、外矢島町に移転～濃陽：文明の頃、斎藤持是院妙椿信仰～濃陽：慶長5(1600) 兵火で宝物類焼失
	竹屋	信州下向記(『新編信濃史料叢書10巻』)：天文2(1533) 5・8「因幡山□□竹屋」、同年10・3「井口林善左衛門所」で宿泊～中村林一氏所蔵文書「織田信孝判物」(県史料編古代中世補遺)：天正10(1582) 12・28竹屋町野尻彦太郎

第2期：斎藤期 (1540年～1566年)	上宮寺 【浄土真宗本願寺派】	旧市史：貞和2 (1346) 葉栗郡大河村に創建～旧市史：加茂郡峰屋村に移転～濃陽：峰屋黄町 (上宮寺地) に移転～市史 (天文日記)：天文20 (1552) [井口上宮寺] ～県史 (上宮寺文書)：慶長5 (1600) [織田秀信禁制] ～濃陽：貞享3 (1686) 火災で本願寺掛所内に移転
	少林山伝燈寺 (東伝寺庚申堂)	濃陽：弘治年中 (1555～1558)、斎藤義龍創建、別伝が開山～濃陽：永禄5 (1562) 義龍の死去により別伝出奔、信長の稲葉山城攻略以降荒廃～濃陽：天正2 (1574) 信長により再建～濃陽：慶長2 (1597) 洪水で流失、慶長6 (1601) 造宮～旧市史：延宝年間井口東伝寺として再興～濃陽：早田村の支村下河原、現存
	遍照山光明院法門寺 【浄土宗 鎮西派智恩院末】	旧市史：応永6 (1399) 3月大桑に創建～旧市史：天文3 (1534) 岐阜に移転、増補：天文年間 (1532-55) に大桑から井口に移動／現存 (善光寺大門)
	護国山含政寺 【浄土宗西山派 立政寺末】	増補：開山海空円上人、永禄4 (1561) 没／現存 (善光寺大門)
	七曲道	両以：斎藤道三の居館建設時に、井ノ口村の百姓が町屋を作る～言繼卿記：永禄12 (1569) 8・1山城へ「坂七曲越」を上る
	百曲道	両以：斎藤氏の稲葉山城築城時に、大桑の町人が越して町立て～言繼卿記：元亀2 (1571) 12・27 「百曲之酒屋」
	本町 (札木町)	両以：斎藤道三の居館建設時に、七曲通に井ノ口村の百姓共町屋を作る～言繼卿記：元亀2 (1571) 12・18 「本町」／承応図：札木町、小字：本町
	大桑町	両以：斎藤道三の居館建設時に、百曲通に大桑の町人を引つ越させた
	金石町	金華：斎藤道三による城下町建設に際し成立
	惣構	両以：斎藤氏の築造、志略・濃陽：土居総堀は、池田輝政以前からあり、天正12～18 (1584～1590) 輝政在城時に堀幅の拡張と土塁の増強
氏家ト全屋敷	斎藤国清屋敷	濃陽：斎藤龍興以前、明屋敷となり法運寺の寺地となる
	斎藤玄蕃屋敷	志略・濃陽：草屋町南裏 【家臣：斎藤利茂。美濃稲葉氏の一族か。永禄年間には信長に下る。天正3 (1575) 信長、稲光郷一円他を死行う。岐阜城主信忠・信孝の家臣】 斎藤期～信孝期まで？
	氏家ト全屋敷	志略・濃陽：中矢島町 法花寺境内 【家臣：氏家直元。斎藤氏奉行人の一人で永禄10 (1567) 信長に下る。美濃三人衆の一人。元亀2 (1571) 没】 斎藤期～信長期まで？

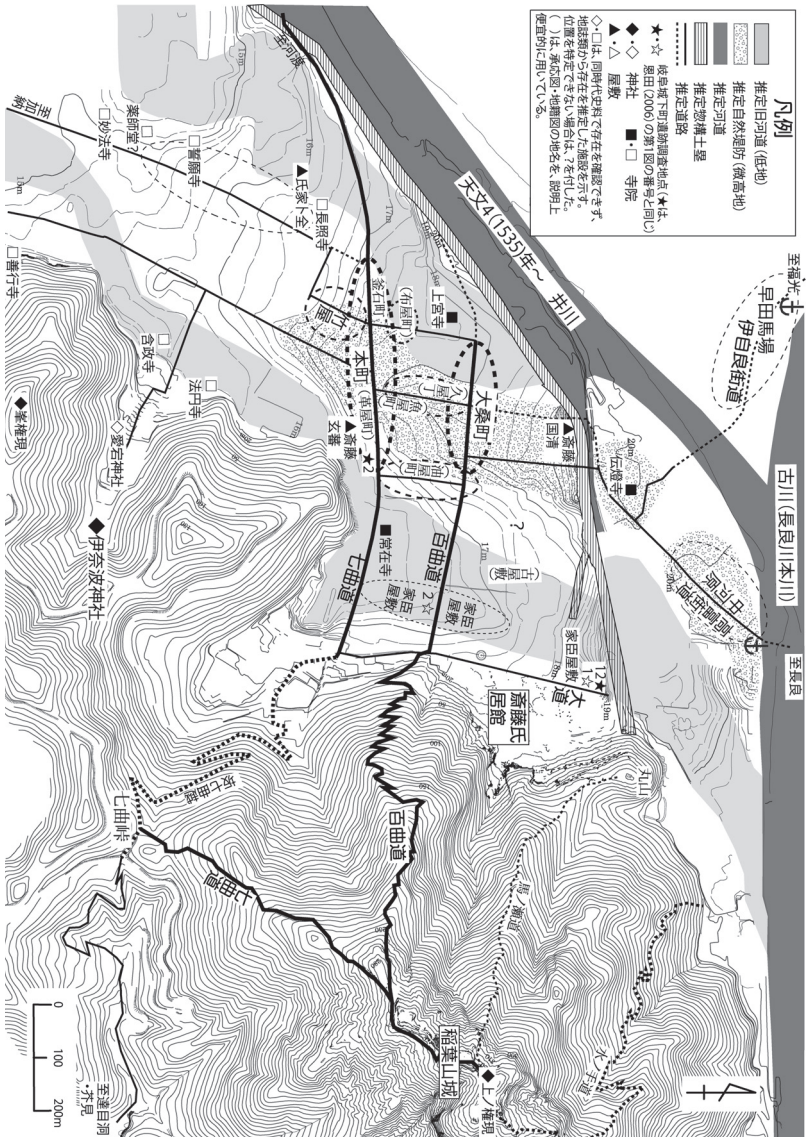
時期区分	山号寺院・神社名（【 】内は宗派）、地名・町名、施設名	出典：来歴／位置（【 】内は関連情報）
第3期：織田信長期（1567年～1576年）	啓運山法華寺【日蓮宗本國寺末】	志略：氏家ト全の屋敷跡、日陽が信長の崇拝を受け清須より移転建立、増補：永禄年中（1558-1570）に信長、尾張より移す、濃陽：信長尾張より移す～言繼卿記（市史）：永禄12（1569）山科言繼、近所の法華堂と長良川を見物～泉史（法華寺文書1）：「本国寺日椿書状」天正7（1579）安土での宗廟後、尾濃の日蓮宗の御頭となる～泉史（法華寺文書3）：天正10（1582）「神戸信孝寺領充行判物」安養院家屋敷と買得屋敷の宛行～泉史（法華寺文書4・6）：天正11（1583）「池田元助寄進判物」・文禄5（1596）「織田秀信寄進判物」屋敷と面する小路通を寄進
	東岩山勝林寺【曹洞宗尾張下津正眼寺末】	増補：開基鶴翁、信長子息の手習いの師匠／増補：尾張小牧～増補：信長岐阜入城の際建立／現存（木造横町）
	本寛寺	濃陽：天正2（1574）羽栗郡竹ヶ鼻より下竹屋町に移動～濃陽：貞享元（1684）外矢鳥町西側総堀の南へ移動
	浄土院【浄土宗立政寺末】	増補：開山空智音大徳、元龜2（1571）没／白木町東
	善光寺（阿彌陀堂）【真言宗】	言繼卿記（市史）：永禄12（1569）山科言繼、善光寺如来に二度参詣～志略：天正頃信長信濃善光寺より如来を移す、旧市史：天正10（1582）信長、中府の新善光寺より移す～旧市史：本能寺の変後、信雄、尾張甚目寺に移す。その後荒廃し如来堂のみ建てる
	大雄山妙覚院誓願寺【浄土宗西山派立政寺末】	増補：開山悦空上人、天文2（1533）没、旧市史：悦空上人は池田輝政の庶兄／増補：尾張清須～濃陽：信長、移転させる／濃陽：外竹屋町上切西側総堀南、増補：下竹屋町堀外～濃陽：天正10（1582）信濃善光寺如来移動の時に移転／現存（善光寺大門）
	普照山浄光院善澄寺【浄土宗西山派立政寺末】	増補：開山光空智音、天正3（1575）没、増補：本尊阿弥陀如来と地藏菩薩は天正年中に信長が建立の際、比叡山より移す／善光寺大門
	本龍山（等訓院大泉寺）【浄土宗西山派立政寺末】	増補：開山教翁等訓、寺院を創建／現存（白木町東）
	松亀山誓安寺【浄土宗西山派立政寺末】	増補：開山尊空上人、永禄7（1564）没、旧市史：文明年中、尾張清須に創建（松亀山無量寿院）～旧市史：永禄10（1567）信長、今泉村に移転～旧市史：天正元（1573）信長、伊奈波に移転／善光寺大門～旧市史：大正5（1916）現在地に移る
	愛護山林泉寺安乘院（愛宕明当）【真言宗醍醐派三宝院末】	旧市史：元龜年間（1570-1573）、安乘院良仁法印開基で創建／旧市史：井奈波通り一丁目
	鳳堤寺→1645法運寺【浄土真宗本願寺派】	濃陽：斎藤龍興の家臣堀将監、斎藤国清の明屋敷に創建～濃陽：慶長5（1600）に焼失するも、正保2（1645）までに再建、改号

材木町	旧市史：信長の時材木業者を集住させて成立、後に東西2町に分かれる～市史近：文政2（1819）「西材木町諸願書留」（天野文書2）：天正年間信長在城時に12人に新座株を許可し、千把木五千づつ12人から運上した。慶長5（1600）落城以降、払米9石に代えて上納。享保18（1733）には新座株所有者は3人となったが、そのうち2人は東材木町の者～面以：材木町より船に乗り尾張名古屋に出る
新町	面以：信長在城時に尾張の町人たちが町を作る
駒屋町（ウツボヤ町）	面以：信長在城時に尾張の町人たちが町を作る
鍛冶屋町	金華：町名は信長の城下建設時に清須の鍛冶職人が居住したことに由来
魚屋町	旧市史：信長による城下町建設に際し、漁業者を連れて居住させた
大工町	旧市史：信長の時隣国の大工を集めてここに置いた
布屋町	金華：織田信長による城下町建設に際し、成立
上今市	金華：織田信長期に成立
西横町	金華：織田信長による城下町建設に際し、成立
ケスキヤヨコ丁	旧市史：信長の時、ひめきを作る坪内弥右衛門が来て居住
白木町	金華：織田信長の時代に岐阜の南口として建設
風呂屋与五郎宿	言継卿記：永禄12（1569）・元亀2（1571）山科言継が滞在する／同左：本町
梶川弥三郎屋敷	志略：今町下ノ切裏に堀あり、梶川弥三郎屋敷に近いため梶川堀という／濃陽：屋敷跡は常在寺となる。その傍らの土橋は梶川橋と呼ばれる。【家臣：梶川高盛。信長家臣。信長死後、信雄の家臣。文禄5（1596）没】
蜂屋兵庫屋敷	志略：蜂屋横町、上宮寺抱地【家臣：蜂屋頼隆。兵庫頭。美濃加茂郡出身であるが永禄2（1559）段階で既に信長に仕える。本能寺の変後は秀吉に仕える。天正17（1589）没】
林甚右衛門屋敷	志略・濃陽・増補：甚右横町、普賢寺【信長家臣】
津田藤右衛門屋敷	志略・濃陽：藤右衛門洞【尾張出身津田氏で、信長の家臣か】／伊奈波城址之図：藤右衛門屋敷五十四間、小字名：藤右衛門洞

典拠史料名：内容、～は時間の経過、／以下は立地情報を示す。近世地誌で記載が重複する場合は、より古い方の地誌を根拠とした。同時代史料については、原則として初出のものを掲載し、特記すべき内容を含む史料がある場合のみ加え、コトックで示した。存在が推定できても、その位置を小字・道路の範囲ですら推定できず、地図化できない諸施設は除外した。典拠史料の略称と刊本は、以下の通りである。

面以：中島面以記文（延文3（1358）作成、『岐阜市史 史料編 近世1』岐阜市、1976所収）、明細：美濃明細記（元文3（1738）作成、平塚正雄編『美濃明細記・美濃雑事記』一信社出版部、1932所収）、増補：増補岐阜志略（明治初年作成、前掲『美濃莚栗見聞集・岐阜志略』所収）、旧市史：『岐阜市史』（岐阜市役所、1928）、市史：『岐阜市史 史料編 古代・中世』（岐阜市、1976）、市史近：『岐阜市史 史料編 近世1』（岐阜市、1976）、県史：『岐阜県史 史料編 古代・中世1』、金華：金華史誌編集委員会編『金華史誌』1993、家臣：各口克広『織田信長家臣人名辞典（第2版）』吉川弘文館、2010





図⑤ 斎藤期井口城下町の景観（第2期：1540年～1566年）



三 城下町と川湊

(1) 舟木売買と薪上納

信長期における長良川水運と商人との関連については、信長が岐阜を去った後の信忠及び信孝城主期のものであるが、以下の四通の史料から考察することができる（線を引いた箇所は、①と③、②と④で異なる箇所を示す。返り点と下線は筆者が付し、年代順に並べた）。

史料①

当所船木之事、如前々、為十二人之者、可令売買、並下川え下候船木、一切令停止訖、新規諸役等免除之事、不可有相違者也

天正九年極月十九日

織田信忠判

史料②

今度船木商売之儀、拾二人被仰付御判被下候、然は、殿様え上木千本木五拾宛、於末代進上可申候、商売之儀、任御判之旨、一切不可有相違候、次孫一拾貳人之内え可被入由心得終左候得ハ、拾三人分に候也

天正九年十二月廿二日

船木拾貳人え

氏管七郎判

史料③ 神戸（織田）信忠判物（折紙）（影写本「大橋文書」『岐阜市史史料編近世一』）

当所舟木之事、如前々、為十二人之者、可売買、并下川え下舟木、一切令停止訖、次諸役等免除之事、不可有相違者也

天正拾年

十二月七日

（神戸信孝）

舟木商人十二人

（花押）

史料④ 竹内光重書状（折紙）（影写本「大橋文書」『岐阜市史史料編近世一』）

舟木商売之儀、如前々、拾九人ニ被仰付候、然は、千は木五千充、於末代進上可被申候、此商売之義、任御判之旨、一切不可有相違候、各被相談、売買尤候、恐々謹言

天正拾年

十二月七日

竹内虎助

舟木方

光重（花押）

拾九人

①・②は万延元（二八六〇）年編纂の地誌『新撰美濃志』に掲載されたもので、原本は確認できない。③・④も原本はないとされる（『岐阜県史 史料編 近世一』）。発行年や字句に誤記と考えられる部分もあり、原本調査の必要がある文書群であるため、分析の趣に置くことは本来難しいことは承知の上で、あえて①・④を比較検討する試みを行ってみたい。

「舟木」は、その名の通り「造船用の材木」（『日本国語大事典』）であろう。また、「せんばぎ（千把木）」は、飛驒の方言で薪を意味する（『日本国語大事典』）。①・③は、岐阜城主が「舟木商人」の取扱品目「舟木」の取引独占権を認めるもので、その見返りとして、②・④は、「舟木方」から岐阜城主に対し、一人あたり薪五千ないし五十（いずれかが誤記か）を上納するよう指示したものと解釈できる。「千把木」という語からしても、「舟木」は長良川上流の飛驒地方から流されてきたものに違いない。また、商品は舟木で上納品が薪であるというセット関係から見ると、両者がそれ

それ長良川上流から輸送されたと考えるより、流送されてきた飛驒の木材を岐阜で購入し、それを造船用材木に加工して売却すると同時に、加工過程で出た端材を薪として上納したと考える方が自然である。近世になると、薪が商品となり、その営業権である「薪座株」の根拠として、これらの史料が位置づけられるが、戦国期当初の取引対象商品は「舟木」であり、その営業税が薪であつたに過ぎない。つまり、この史料は、戦国末期の岐阜に「舟木」取引の特権を持つ同業者集団が存在したことを示している。

①・③は岐阜城主が特権を認める上位史料であり、②・④は、これを受けて、氏管や竹内が、具体的に営業税に相当する薪の上納指示を行ったものである。①・③の特権対象者が舟木商人十二人で定型化するのに対し、②・④の薪上納対象者は、②では一人追加で十三人とするよう指示され、④では舟木方十九人となっている。特権枠は十二人であるが、実際に商売を行う徴税対象者は、新規参入者を含めて、それ以上に存在したということであろうか。

特権の本身について検討しよう。①・③は、当所、つまり岐阜における舟木売買を十二人に限って認めると同時に、「下川え下舟木」とあるので、舟木を岐阜より下流に流すことを停止させたと言う。後段は文意が取りにくいが、舟木商人以外による舟木の下流への輸送、つまり抜け荷を停止させてほしいと、舟木商人側から要望があり、岐阜城主側がそれに応えたということであろう。岐阜で売却する舟木とは、長良川沿いの船大工たちが、日常的に使用する川船用の材木である可能性が高い。とすると、舟木を岐阜から陸上輸送して売却することは考えにくく、舟木の下流への抜け荷禁止とは、全ての舟木商品出荷の独占を意味するのだろう。つまり、①・③は、出荷を含む、岐阜における全ての舟木取引の独占権を保証したものである。これらの舟木営業独占権が、岐阜城主である織田信忠や信孝によって、「如前々」承認されたということは、先の城主である信長が、既に舟木商人にこれらの権利を認めていたことを示す。

一方、②は、「このたび」舟木商売が十二人に仰せ付けられ、①の御判が下されたことを受けて、薪を上納するよう指示しており、信長期からの先例踏襲ではなく、信忠によって新たに設けられた上納制度であることを推測させる。信孝期の④では、舟木商売は「如前々」十九人に仰せ付けつけてあるので、薪を上納するよう指示するのみで、御判とい

う特権の付与の見返りであることについては触れていない。これは、既に④は②の先例を踏襲するだけで良かったためだろう。信長期より舟木商人十二人に対し、岐阜における舟木営業独占権が与えられていたが、信長期にはそれに対する薪の上納制度はなかった可能性がある。その後の信忠・信孝期に、特権商人十二人を含め、実際に舟木営業に携わっている商人の数に応じた営業税が課せられるようになったのではないだろうか。

（2）岐阜城下町の中の材木町

舟木商人は、岐阜のどこで、どのような形態で営業を行っていたのだろうか。これを考える上で有用な史料が、近世後期の文政二（二八一九）年に、西材木町の市十郎という者から出された、薪座株取得に伴う営業開始許可願である（天野文書「西材木町諸願書留」『岐阜市史 史料編 近世一』）。ここに、十九世紀に至るまでの「薪座株」の来歴が、以下のように記されている。薪座株は天正年中の織田信長岐阜城在城期に始まったもので、十二人に免許が出され、一人あたり薪五千ずつ上納することとなった。慶長五年の岐阜城落城後の幕府代官の大久保長安の時に、薪に代えて米で上納するよう変更された。延宝年間までは十二人が上納していたが、徐々に商売が傾き、うち六人が潰れてしまった。元禄八（一六九五）年には更に三人が潰れ、残り三人（西材木町の市十郎、東材木町の吉兵衛、同町の惣吉）だけが残った。このうち西材木町の市十郎も、紺屋職に商売替をした。天明七（一七八七）年に吉兵衛の薪座株は中河原の代助へ、同三年に惣吉の株は東材木町の甚兵衛へ譲り渡された。天明年間に小揚（荷揚げ業者）四十人の中に、新規の薪座株二口（中河原紋右衛門・善左衛門）が増設されたが、本株は中河原代助と東材木町甚兵衛の二口である。しかし、本来ならば、西材木町市十郎も薪座株免許の家筋で、とりわけ織田家の御墨附も頂戴し、所持している。

この来歴の記述から、①④の史料の記す舟木営業独占権と薪上納が、近世においては「薪座株」という薪商売の権利に転化していること、本株の所有者十二人のうち、十七世紀末まで残った町人は皆、東西材木町の者であること、その後の経緯で十九世紀には中河原の者が多くの株を所有するに至ったこと、西材木町市十郎も、十九世紀段階では織田

氏花押の入った①・③の文書を所持していたことが知られる。③の史料が、「舟木商人十二人」の同業者集団ないしその代表者に宛てたものであれば、十二人のうちの一人の家筋であるという市十郎が十九世紀に所有していた文書は、③そのものであるとしても不思議はない。しかし、十二人の商人それぞれが、戦国期に同内容の文書を得た可能性もある。本株の最終的な移動先の一つは「中河原の代助」であるが、③の史料調査時点での所有者は、くしくも元浜町、つまり中河原の大橋代助氏である。ここで想像をたくましくすると、本来十二通発給されたうちの一つである③の文書が、本株と共に中河原の代助の元に移動し、それとは別に、③と同内容の文書が西材木町の市十郎に存在したことが推測される。

十七世紀末の時点での本株所有者が、東西材木町の町人であるという事実は見逃せない。その時点で廃業した商人達が、どの町の町人であるのか知るすべはないが、残った商人全員が材木町の町人であったことは単なる偶然とは思えない。つまり、戦国期の舟木商人は、その名の通り、多くが材木町に集住していたと考える。しかし、図⑥にみるように、東西材木町は長良川（井川）に近いものの、戦国期の本流であった古川からは距離を隔てており、川との間も惣構の土塁で仕切られた岐阜城下町内にあった。一方、十九世紀に薪座株を多く所有するようになった中河原は、岐阜城下町外の堤外地にある川湊であった。一見すると、上流から流送される木材の集積、荷揚げ、製材、加工、舟木の川下への売却・輸送という作業を行うことができるのは、河岸まで物理的障壁のない中河原の方であろう。それでは、なぜ戦国期の舟木商人は、惣構によって河岸との間が遮断される材木町に集住したのだろうか。たとえば材木町に隣接する惣構外側の井川で上記業務が可能だったとしても、上流から流送される木材は、古川と井川に分かれ、その多くは本川の古川に流れてしまうだろうから、この場所は独占営業には不利である。長方形街区の計画的・人為的形態からは、それは商人たちの自由意志ではなく、材木町が信長期に政策的に形成された同業者町であったことが示唆される。

このように考えると、信長期の舟木商人の実態とは、木の集積、荷揚げ、製材、加工、保管、積み直し、輸送を担う現業部門の本川沿いの川湊を支配しつつ、城下町内の材木町で、原材料である木材の購入や、商品である舟木の販売、

在庫管理、輸送の指示・管理等の間屋業を営む有力町人であったのではないだろうか。言い換えれば、物流の現業に従事する労働者から成る地区が、城下町外の川湊であり、舟木商売の取引と管理に従事する間屋商人の集まる地区が、城下町内の材木町であったと考える。なお、木材は造船用に限らず、幅広い用途があるため、別の用途に供する材木に関する同業者集団が、材木町の中に存在した可能性もある。この川湊とは、具体的には早田馬場と中河原であるが、尾張藩の最初の川役所が早田馬場に置かれ、後に古川の堆積が進んだことで中河原に移ったことを想起すれば、信長期の川湊の中心は早田馬場であった可能性が高い。後に川役所の移動と共に、川湊の中心も中河原に移ったのであろう。

信長が安土に移る前年の天正三（一五七五）年、鳴海助右衛門に長良川の運材に対する六分の一の課役の収益が与えられ、鳴海が信長政権下で、長良川の木材流送（筏流し）の管理者を務めていたことが知られる（横山二〇一二）。これが、織田家の家督を継いで岐阜城主となった信忠の指示であることから、鳴海による実際の運材支配と管理は岐阜で行われていた可能性が高い。この信長政権による岐阜における長良川運材の直接支配が、近世尾張藩の川役所に継承されたと考えられる。とすると、筏流しの中継作業と鳴海による管理は、具体的には当初尾張藩の川役所が置かれた早田馬場で主に行われていたと推定される。つまり、川湊には現業部門だけでなく、木材流送に関する武家領主の管理施設が存在した可能性がある。先述の岐阜における舟木営業で使用される木材以外にも、当然のことながら、大量の木材が岐阜を中継して下流に流送されていたのだろう。そして、岐阜で加工販売されない木材の流送については、信長政権の直接管理下に置かれていたことがうかがえる。

四 おわりに

本稿では、明治期地籍図と承応図の考察を深化させ、井口・岐阜城下町における街路と町の形成順序を推定した。これに寺社、町等の諸施設の分布を加えて、城下町の形成過程の地図化を試みた。このプロセスにおいて、特徴的な立

地・形態をみせる町が、信長期に長方形街区として形成されたと推定した材木町である。さらに、長良川の舟木売買と信長政権との関係を示す史料群が伝存していることから、材木町の成立の意味について考察した。

その結果、信長期の岐阜においては、役割の異なる川湊と問屋町とが空間上、明確に分離され、前者は湊町を形成し、後者は城下町の一部に組み込まれ、両者の機能が連携することで長良川水運の「港町」が成立したと考える。既に斎藤期より、惣構によって湊町と城下町は物理的に分離していたと推定したが、両者に役割を分担させつつ、機能上調節させたのが信長期であったと考える。そのための都市景観上の「装置」が、長方形街区の材木町であり、流通経済を高度化し、同時に岐阜城主による保護と管轄を容易にする意図をもって設置されたのである。

ここで、千疊敷遺跡B地区で検出された、厚い土壁と地下構造を伴う特徴的な建物に関する、建築史学の高屋麻里子の論考（二〇一三）に注目したい。高屋は、フロイスの記録と照らしつつ、この建物の基礎構造と二階部分までが土蔵につながり、白い漆喰塗の外観を持ち、上部は木造で周辺建物と接続する高層建築である可能性を指摘する。そして、この高層建造物が港からの視点を意識していたと推定し、特徴的な白い壁が水面の舟から見えることを想定している。この港の位置は不明とされているが、図⑥の地図上で、どの範囲からB地区の構造物（●）が見えるかを検討すると、点線のような範囲となる。奥まった谷に位置するB地区は、惣構の内部では材木町付近、城下町外では早田馬場と長良川本川（古川）、井川の川面からのみ、視界に入る。ということ、信長期には、材木町や早田馬場から居館の特徴的な高層建造物に向かう視線が重視されたことを意味する。これは、城下町内の問屋部分の材木町と現業部門の川湊とかなる「港町」が、信長期の岐阜城下町において、とりわけ重視されていたことを示しているのではないだろうか。

この湊町と城下町が空間的には分離しつつ、機能的には密接に結ばれる岐阜の空間構造は、近世にも受け継がれた。ただし、近世になると、尾張藩による長良川役所が設定され、戦国期の舟木商人が担っていた物資の集積・輸送の独占といった特権は、川役所へ集約、吸収される。そして、残った舟木の売買権のみが、後に薪に対象品目が縮小されつつ踏襲され、薪座株として定着したと推定される。

付記

本稿作成にあたり、岐阜市教育委員会の方々、とりわけ内堀信雄氏、高橋方紀氏、井川祥子氏、高木晃氏には、史料の便宜を図って頂き、豊富な情報を御教授頂いた。また、舟木に関する史料解説には、服部光真氏（愛知県立大学大学院生）から数々の有益なご助言も頂いた。ここに記して、厚く御礼申し上げたい。本稿は、戦国期城下町井口・岐阜の景観形成と地理環境について論じた別稿（山村二〇一四）の実証部分を補う役割も果たしている。

参考文献

- 内堀信雄 二〇〇六「美濃における守護所・戦国城下町の展開」内堀信雄・鈴木正貴・仁木宏・三宅唯美編『守護所と戦国城下町』高志書院
- 内堀信雄 二〇〇八「井口・岐阜城下町」仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』高志書院
- 恩田裕之 二〇〇六「井口・岐阜」内堀信雄他編『守護所と戦国城下町』高志書院
- 筑真理子・内堀信雄 二〇〇三「金華地域の様相」守護所シンポジウム@岐阜研究会編『守護所・戦国城下町遺跡を考える―美濃国からの提案―（シンポジウム記録集）』
- 筑真理子 二〇〇九「近世岐阜町の成立と岐阜奉行」岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究四』清文堂出版
- 岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団編 二〇一三『岐阜城跡二』
- 小島道裕 一九八四「戦国期城下町の構造」日本史研究二五七
- 高屋麻里子 二〇一三「千疊敷遺跡B地区の景観と建物の復元イメージ」『岐阜城跡二』
- 土山公仁 一九九一「岐阜城とその城下」岐阜市歴史博物館編『信長・秀吉の城と都市（特別展図録）』
- 土山公仁 一九九二「岐阜一五六七―一五八二」岐阜市歴史博物館研究紀要六
- 山村亜希 二〇〇八「戦国期山口の景観とその変化―街路・地割の形態分析を通じて―」愛知県立大学文学部論集五六（日本文化学科編十）
- 山村亜希 二〇一四（予定）「戦国城下町の景観形成と「地理」―井口・岐阜城下町を事例として―」仁木宏編『都市Ⅱ』青木書店
- 横山住雄 二〇一二『織田信長の尾張時代』戎光祥出版